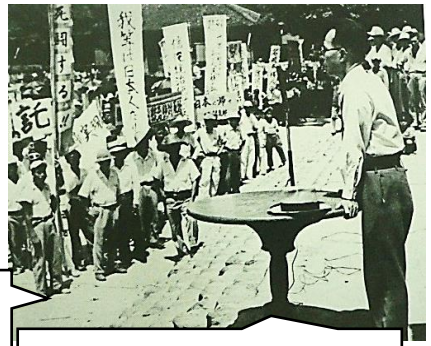
【シマ（奄美）の歴史】⑬　奄美群島日本復帰運動

日本本土と切り離され、極度の貧困と絶望の中、奄美の日本復帰を目指して、昭和26年２月、「奄美大島日本復帰協議会」が結成され、そのリーダである議長には徳之島出身の泉芳朗氏が選ばれました。運動の始まりは署名運動でした。「このまま奄美がアメリカ統治下では生きていけない。奄美を日本に返してほしい。」と、人々は必死でした。署名運動はまたたく間に奄美全体に広がり、わずか3か月間で当時の奄美の14歳以上の99.8%が署名し、そして各地で集会や行進がなされました。



【写真：伊仙町歴史民俗資料館】

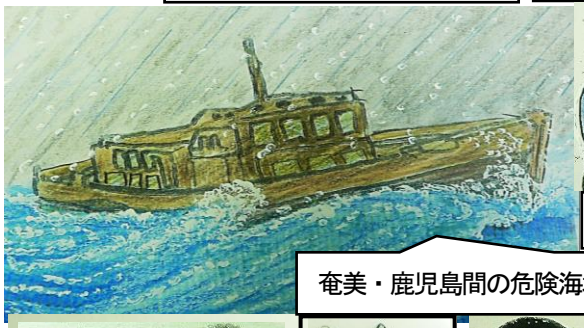
日本復帰を訴える泉法朗議長

復帰運動に学生たちも立ち上がりました。大島高校自治会は署名運動・街頭宣伝などをくり広げ、特にアメリカ軍から禁止されていたプラカードを掲げての名瀬市内デモ行進は、全島民の復帰運動へ大きな勇気づけとなりました。復帰運動は奄美群島内だけでなく、奄美出身者らを中心に日本各地でも行われました。上右写真は、昭和25年8月、東京奄美学生会による東京新橋駅前での「奄美大島の復帰と渡航の自由」の署名運動です。奄美のために出身者らも熱い想いで行動しました。これは最終的に全国集計で100万人を超える大署名となりました。

大島高校生らの復帰運動行進
【写真：南海日日新聞】

東京での復帰署名運動
「写真：東京奄美会」

日本復帰協議会（泉芳朗議長）、集団断食の後、政府やアメリカ大使館などに日本復帰の陳情をしますが、アメリカ軍政府からは許可は出ませんでした。そこで昭和26年8月に群島民の代表として、11名を派遣しました。アメリカ軍の監視をくぐりぬけ出港（密航）しましたが、途中、船のエンジン故障や荒波で漂流の連続。鹿児島到着後も警察の尋問で密航がばれ、逮捕拘留など苦難の連続でした。しかし関係者の働きかけで釈放され、東京に到着し、国会・政府などに奄美の窮状を説明し復帰を直訴しました。この命がけの行動は、日本本土でも多くの感動と賛同を集めました。



奄美・鹿児島間の危険海域「七島灘」を命がけの密航

密航がばれ逮捕楊柳される

鹿児島から陸路、汽車で東京へ

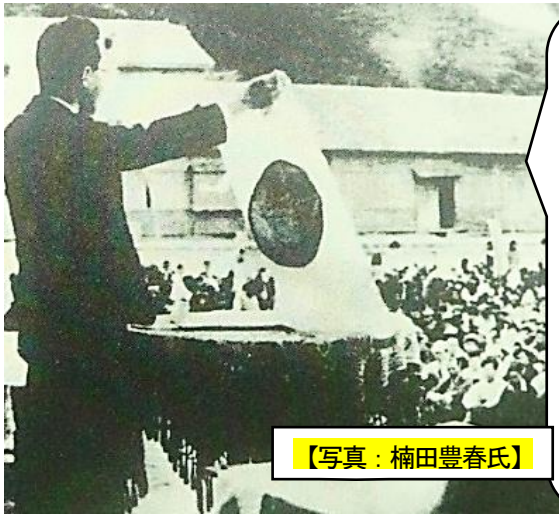
政府高官

密航陳情団

奄美は日本だ、本土に復帰を！　食料と仕事と自由を！　子どもに本土並みの教育を！　物価高、低賃金、生活苦だ。

【シマ（奄美）の歴史】⑭　奄美群島日本復帰運動

アメリカ軍統治下の奄美では、日の丸・君が代は禁止され、競技大会や卒業式などの儀式でも日の丸掲揚・君が代斉唱もなくなりました。泉芳朗議長は、「このままでは奄美の子ども達が日本人であることを忘れてしまう。」と危機感を持ち、名瀬小学校校庭での「祖国（日本）復帰郡民大会」で、日の丸の旗を手に、子ども達に声をからし呼びかけました。こうして、復帰運動はアメリカ軍から様々な禁止妨害を受けながらも、奄美内外で大きく盛り上がっていきました。



【写真：楠田豊春氏】

奄美の子どもたちよ。君たちは日本人だ。日本人であることを決して忘れてはいけない。この旗をしっかりと見なさい。日の丸の旗だ。君たちの祖国日本の旗だ。これが日本人である君たちの旗だ。よく覚えておいてほしい。決して忘れてはいけない。

泉芳朗議長は、昭和26年8月の郡民決起大会で「祖国（日本）復帰の民族悲願を断食で世界中に訴えよう。」と、名瀬の高千穂神社にこもって5日間・120時間の断食に入りました。この時、泉芳朗議長は連日の復帰運動と夏の暑さで疲れ切っており、周囲は心配でしたが、それをおし切っての行動でした。『泉芳朗、断食に入る』との知らせは、すぐに奄美全島に伝わりました。そして奄美各地で続々と決起集会が開かれ、参加した子どもからお年寄りまで、その場で24時間の集団断食祈願を行いました。これは、全国紙でインドの非暴力独立運動家ガンジーになぞらえて、泉芳朗議長は「奄美のガンジー」と報道され、日本中に復帰運動が伝えられました。この断食はその後も郡民により、一日断食としてくり返し行われました。この集団断食を体験した当時の大島高校自治会員の証言です。（※文面を易しく書きかえています。）

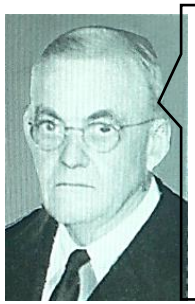
泉芳朗議長と集団断食【写真：奄美市ＨＰ】

名瀬市では8月4日の夜10時に、多くの市民が名瀬小学校校庭で「日本復帰の歌」などを歌い夜を明かしました。そして、翌日の朝6時、高千穂神社へ行き断食5日目の泉議長と合流し、その夜10時までの24時間の断食をしました。広い境内は断食をする市民でいっぱいでした。泉芳朗議長が「断食悲願」の詩を読み上げると、復帰に対する人々の意気込みは最高に盛り上がりました。

泉芳朗議長は、多くの支持者の応援を受けて名瀬市長となります。名瀬市長としての行動は、復帰運動にこれまで以上に大きな力となりました。まず、鹿児島で県知事と会談し、復帰運動への後押しをお願いしました。さらに東京で総理大臣や外務大臣、そしてアメリカ大使と会談し、奄美の実情と人々の願いを語り、「奄美は日本だ。奄美の人間は日本人だ。奄美を日本に返してほしい。」と日本復帰を熱く訴えました。こうして奄美群島民一丸となった復帰運動、出身者らの本土での様々な支援活動、国会での「奄美群島日本復帰決議」などで、復帰運動は奄美だけの問題ではなく、日本国の大きな問題となっていきました。

【シマ（奄美）の歴史】⑮　奄美群島日本復帰運動

そして、ついにこの運動が実を結ぶ日が訪れます。1953年（昭和28年）８月、日本を訪問したアメリカのダレス国務長官は、内外記者団に対し「アメリカ政府奄美大島群を日本に返還する用意がある。」という、「ダレス声明」を発表したのです。



アメリカ合衆国政府は、奄美大島群に対して持っている権利を放棄する必要な取り決めが日本政府との間に終わり次第、これら諸島に対して持っている日本の権利を復活させる用意がある。奄美大島の返還は、その住民と日本国民を再び結合させるものであり、これはアメリカにとっても満足な事であり、また非常に喜ばしいことである。

【左写真・ダレス国務長官】【文は「奄美復帰史」村山家國　南海日日新聞社刊より抜粋引用】

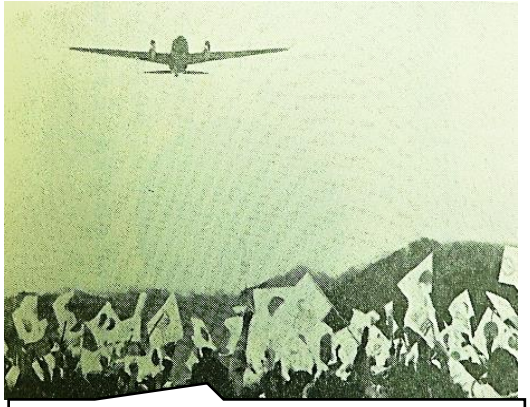
この「ダレス声明」のニュースは、その日のうちに奄美全島に伝えられました。各家庭では、一斉に日の丸を掲げ、提灯行列が町や村に溢れ、万歳の声が高らかにわき上がりました。そして「ダレス声明」から４か月後の1953年（昭和28年）12月25日午前０時、奄美群島は正式に日本復帰しました。日本でありながら日本でなく、日本人でありながら日本人でなかった苦難の８年間が終わったのです。名瀬では、おがみ山山頂に花火が上がり、サイレンが鳴り響き、それと共に山腹のマイクから復帰祝賀の歌「朝は明けたり」が流れ、奄美の門出を祝いました。おがみ山には日の丸がひるがえり、人々はしみじみと「日本復帰」をかみしめ、各地で「万歳！万歳」の大合唱とお祭りが行われました。

提灯行列【写真：奄美市ＨＰ】

復帰に万歳する島民たち
【写真：鹿児島県】

復帰の喜びにわき上がる島民たち
【写真：奄美市ＨＰ】

おがみ山に揚がる日の丸
【写真：南海日日新聞社】



復帰を祝う報道機に万歳する島民たち
【写真：奄美市ＨＰ】

【シマ（奄美）の歴史】⑯　奄美群島日本復帰運動

名瀬小学校で開かれた復帰祝賀集会で、泉芳朗議長は会場に集まった多くの郡民に向かい、声高らかにさけびました。

これで８年間の苦悩は一変して、今日、この日のわれわれは本当の日本人になったのであります。

さあ、みんなで日の丸をかかげ、希望と喜びに、胸を大きく広げて背骨をしっかり伸ばし、奄美大島日本復帰万々歳を三唱し、

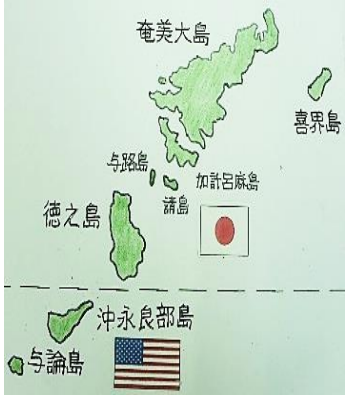
平和な楽しい郷土復興の第一歩を力強くふみ出そうではありませんか。

鹿児島県大島郡、バンザーイ…バンザーイ…バンザーイ。　【写真：奄美市ＨＰ】

このように泉芳朗議長を中心に、奄美島民・出身者・関係者が一丸となり奄美の日本復帰を成し遂げました。この運動で誇るべきは、アメリカ軍・政府からの数々の禁止・妨害・取り締まりにも暴力的に対立することなく、また、破壊活動をすることもなく、「奄美島民は日本人だ。奄美は日本だ。奄美を日本に返してほしい。」と平和的に熱く訴え続けたことでした。まさに「無血革命」でした。

しかし、復帰までには、こんなこともありました。【昭和27年9月、日本の外務大臣と対談したアメリカのマフィー駐日大使の発言です。】

奄美群島の日本返還は、沖永良部島と与論島を除こうと考えている。



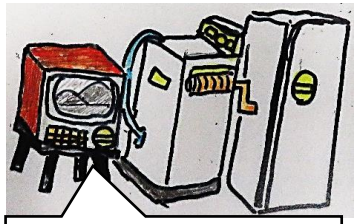
この発言に群島民はもう然と反発し、両島では学童も参加し、デモ行進や「われらを日本に返せ」との寄せ書きがなされました。

奄美名瀬でも与論村の福富雄氏、和泊町の肥後業昭氏、知名町の上川盛藏氏も出席した日本復帰協議会対策会議で「民族の分断は許さない。」「分離返還ならば島民総引き上げをする。」と強固な態度を表明しました。そして、雨風の中、「分離返還抗議の、断食やデモ行進が行われました。そして鹿児島・大阪・東京でも出身者らを中心に政府への抗議活動などを行いました。島の人々の「奄美は一つ」との熱い想いと団結力でした。もし日本政府や群島民がこれを許していたら沖永良部島と与論島の日本復帰はさらに遅れていたことでしょう。

【左写真と文・「与論町琴平神社の南側に沖縄県を望む岩肌がある。子どもであれば80人が集える。『奄美復帰なる』の報を聞き、子ども達はここで日の丸を打ち振り、復帰の喜びを表した。」　提供　与論町中央公民館より】

【ヤマト（日本）の歴史】⑬　昭和～平成～令和時代

1956年に国際連合に加盟し、国際社会に復帰した日本は高度経済成長の時代になります。日本の伝統の「モノづくり」の高い技術と勤勉さで電機や自動車などの製造業が世界的な企業に発展し、中小の企業も技術革新や発明がなされました。家庭では「三種の神器」と呼ばれた白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機などの電化製品が広まり、生活が豊かになってきました。この時の労働力不足を支えたのが「金の卵」と呼ばれた学校を卒業したばかりの集団就職生たちと、地方から期間限定で都市の建設現場や工場で働く出稼ぎの方々でした。



プロレス中継が人気だった

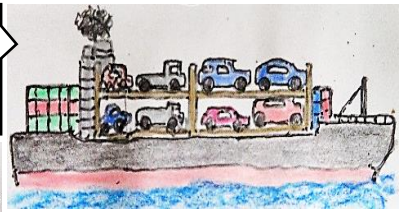
三種の神器から３Ｃへ

「金の卵」
集団就職生

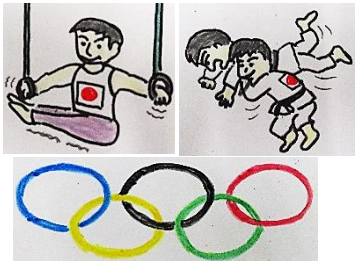
【黒部ダム（富山県）】
1956年着工。171名の殉職者を出す難工事の末７年後に完成。高さ１８６ｍ、幅４９２ｍ水力発電で電力不足が大きく解消された。

政府は産業発展のため、道路や港の整備、ダム建設などを進め、製鉄・火力発電・石油精製などの重化学コンビナートが造られました。また、貿易も拡大し、工業製品が海外に多く輸出されました。国民の生活も豊かになり、高額商品の３Ｃ（カー・カラーテレビ・クーラー）が多くの家庭に広まりました。（※カラーテレビの発売の1960年の値段は約５０万円。当時の新採公務員の月給は約１万円）

特に自動車が多く輸出され日本経済が豊かになった

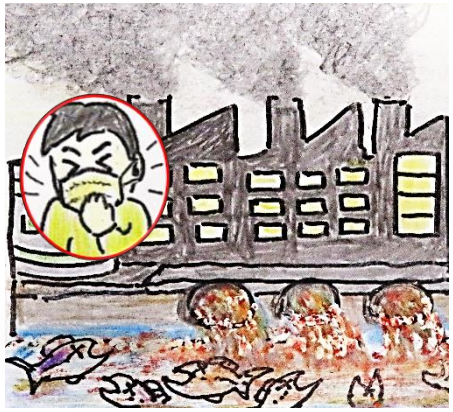


1964年（昭和３９年）にアジアで初の東京オリンピック・パラリンピックが過去最多の国・地域の参加で盛大に開催されました。　日本は、体操男子団体・バレー女子・レスリング・柔道などで金メダルを獲得する大活躍でした。オリンピックに向け競技施設はじめ下水道も整備され、高速道路や地下鉄、東京大阪間に新幹線が開通し好景気となり、人々は戦後復興を実感しました。東京オリンピックを契機にカラーテレビの販売が大きく伸びました。



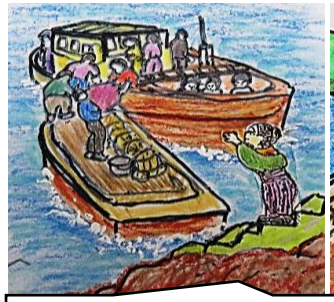
こうして日本全体が活気づいていく反面、工場からの大量の有害な煙や汚染排水などで、人々の健康被害や自然破壊などの公害も発生しました。また、自動車の排気ガスや家庭からの汚水による河川の汚染なども深刻な問題になりました。この危機を打開するため1971年（昭和46年）に、環境庁が設置され、公害防止対策がとられました。その結果、鮭が再び川に戻ってくるなど、各地で状況が改善されてきました。その後、世界で最先端の公害防止技術を持つようになりました。　（※　下記は過去の四大公害）

（水俣病・新潟水俣病（メチル水銀原因）　四日市ぜんそく（有害ガス原因）　イタイイタイ病（カドミウム水質汚染原因）



【シマ（奄美）の歴史】⑰　日本復帰後の復興

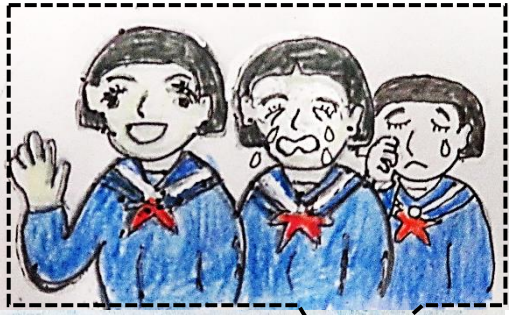
日本復帰の翌年の１９５４年（昭和29年）6月、「奄美群島**復興**特別措置法」が日本の法律として制定されました。これは、戦後にアメリカ軍の統治下に置かれた奄美の発展ならびに、住民生活の安定および福祉の向上を目的としたものです。1974年（昭和49年）に現在の「奄美群島**振興開発**特別措置法」に改題されています。これにより、公共事業として道路や港湾・空港などが整備されました。そして現在では島民向けの船賃や航空運賃の割引、物資の輸送費の支援などもなされています。



道路が整備され、それまでの海上輸送からバス開通などで陸上輸送が主になっていった。しかし、当時は、でこぼこの曲がりくねった山道が多かった。

昭和28年、地元の企業が運輸会社を設立した。鹿児島～奄美～沖縄航路が充実し島民の生活向上になった。

喜界島で昭和34年空港開設し、その後、各島で開設され、与論島で昭和51年に開設された。

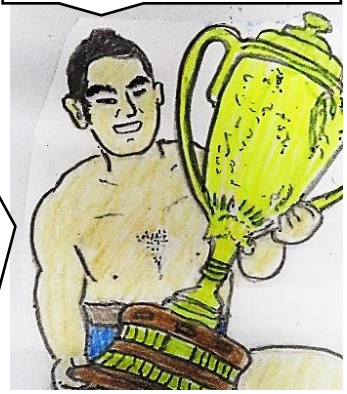


名瀬港近辺でも海を埋め立て、会社や住宅ができた。

昭和30年代、中学を卒業し関西・関東方面に集団就職する生徒も多かった。希望と不安の旅立ちだった。紡績会社などの労働力になった。家族友人たちは旅客船が遠くになるまで見送った。

第46代**横綱朝潮太郎**（本名：米川文敏）は、1929年（昭和4年）徳之島町井ノ川の出身。体格に恵まれ、島内の相撲大会での活躍で周囲から相撲界入りを期待されます。当時、徳之島はアメリカ軍統治下だったため、神戸の親戚を頼り密航します。建設現場人夫を経て、高砂部屋に入門します。相撲部屋の厳しいしきたりや稽古に耐え、番付を上げますが、持病の腰痛が悪化し、負けが続き稽古もできず番付も下がりました。しかし、好きな酒やたばこをやめ、精進を重ね、再起を果たし、ついに、昭和34年3月に横綱に昇進しました。幕内5回優勝の豪快な相撲と温厚な人柄で人気抜群でした。引退後も親方として多くの名力士を育て、相撲協会の重役として活躍しました。朝潮の活躍は徳之島はじめ奄美の人々に勇気と感動を与えました。地元・徳之島町井ノ川には横綱朝潮の栄誉を称える銅像が建てられています。

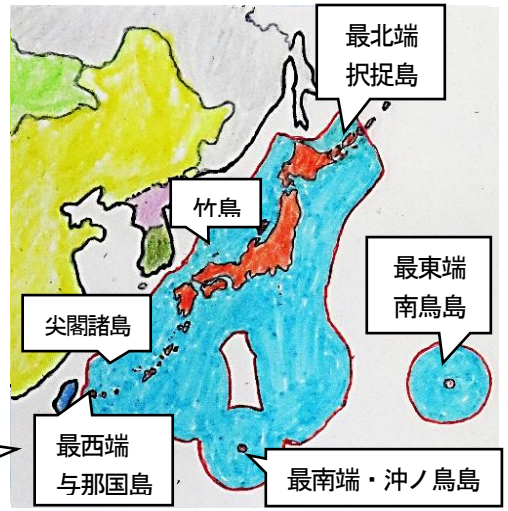
大阪場所で４度優勝
異名は「大阪太郎」



【ヤマト（日本）の歴史】⑭　現代（昭和後期～平成～令和）そして未来へ

日本は戦後の復興を成し遂げ、平和で豊かな国を築き、世界の発展に貢献しています。発展途上国や地域に、井戸や水道、道路整備、病院建設など多くの援助を行っています。また、物理学者・湯川秀樹博士はじめ自然科学分野で数多くのノーベル賞受賞など、日本の科学技術が発達し、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されるなど、伝統文化が世界に認められています。

しかし多くの課題もあります。その一つが領土問題です。北海道北部の北方領土がソ連（現ロシア）に占領され、島根県竹島が韓国に占領されたままです。中国は沖縄県の尖閣諸島近海への侵入を繰り返しています。他にも北朝鮮の日本人拉致の事件もまだ残されています。今後の平和的な解決が課題です。



□は日本の排他的水域（200 海里）

人口問題もあります。総務省統計によると、終戦直後の 1945 年（昭和 20 年）の日本の人口は約 7200 万人でした。その後は増加を続け、1970 年（昭和 45 年）には 1億人をこえ、2008 年（平成 20 年）に約 1 億 2800 万人でピークとなりましたが、その後は減少傾向で、2022 年（令和 4 年）は約 1 億 2500 万人になりました。新生児も減少傾向にあります。そのため特に地方では児童生徒数が減少し、学校の統合・廃校が増えてきました。そして「働き盛り」の年代も減少しており、国の経済活動にも支障が出ています。今後も人口の「少子高齢化・過疎化」と「都市集中」が予想されており、その対策も課題です。

【人口問題】少子高齢化過疎化と大都市集中

日本は大きな自然災害を受けています。1995 年（平成 7 年）には阪神・淡路大震災で火災も発生し、6000 人以上が亡くなりました。2011 年（平成 23 年）には東日本大震災により、大津波が東北地方から関東地方の太平洋沿岸を襲い、多くの家屋を破壊し、２万人近くが犠牲になりました。日本は「台風の通り道」です。1959 年（昭和 34 年）の伊勢湾台風では高潮などで 5000 人以上が犠牲になりました。他にも豪雨による河川氾濫や豪雪や火山爆発など数多くの被害があります。今後の防災対策が課題です。

避難訓練が自治体や学校で行われています。

しかし、日本の誇りとするのは、いずれの災害でも避難の時・避難所での配給の時など整然と行動し、国内外から多くのボランティアなどの支援も受け、助け合い、復興に励んでいることです。これは世界中から賞賛されています。今後も互いのつながりを大切にし、これらの課題を乗りこえ、豊かな国づくりに努めていくことが求められます

ユネスコ無形文化財・和食

【シマ（奄美）の歴史】⑱　現代　昭和後期～平成～令和　将来へ

2021 年（令和 3 年）7 月、奄美大島・徳之島・沖縄島北部・西表島がユネスコ世界自然遺産に登録されました。これらの島々は、かつてユーラシア大陸と陸続きでしたが、数百万年前に大陸と分かれ現在の島になりました。ここには山や丘陵地があり、連続した亜熱帯多雨林が繁り、天敵もいなく環境に対応したことで、大陸や日本本土では絶滅した生き物や固有種が存在しているのです。今後は、ノネコ・ノヤギ・ノイヌ・外来種、そして盗掘採集・ロードキルなどへの対策が課題になっています。

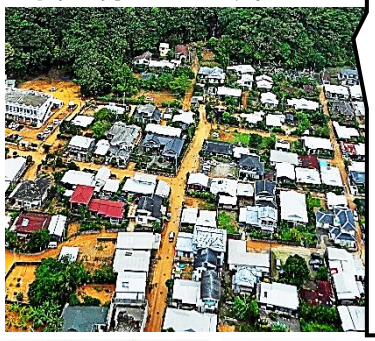
奄美群島の今後の課題の一つが人口減少です。下記表は国勢調査の抜粋（総人口への割合【%】は執筆者計算）。

	１９５５年（昭和３０年）	１９８５年（昭和６０年）	２０２０年（令和２年）
奄美群島総人口	２０万５３６３人	１５万３０６２人	１０万４２８１人
０歳～15 歳未満【割合）	７万８０５７人【３８%】	３万７４２５人【２４%】	１万４５５０人【１４%】
15 歳～65 歳未満【割合】	１１万１５１５人【５４%】	９万１２６９人【６０%】	５万３０３１人【５１%】
６５歳以上　　【割合】	１万５７８６人【　８%】	２万４３６８人【１６%】	３万６５０７人【３５%】

【2020 年（令和 2 年）の年代別割合】
【１４%】　【５１%】　【３５%】

1955 年（昭和 30 年）から人口は半数ほどになりました。新生児の減少や進学就職で本土への流出などが考えられます。「少子高齢化過疎化」で多くの集落で空き家も増え、学校の統合・廃校も続いています。今、各市町村で奄美の魅力を発信し移住者・帰郷者の受け入れや企業誘致などで人口減少対策に努めています。

2010 年（平成 22 年）10 月、奄美は観測史上最高の豪雨（名瀬で 24 時間 648 ㎜）に襲われました。各地でがけ崩れや道路の決壊、川の氾濫、家屋の浸水など甚大な被害が出ました。また、「台風の通り道」と言われる奄美は、毎年数個の台風が襲来します。その度に家屋や農産物などに被害が出ています。そして停電や船便の欠航で生活に支障をきたしています。各市町村で避難場所を設置し、住民の安全対策を行っていますが、地震・津波への警戒と併せて、今後も自然災害への対策が課題です。



豪雨災害の日、大和村役場周辺も泥水で通れなかった。【提供・大和村】

奄美には誇りとする優れた技術や伝統文化が数多くあります。大島紬は幾多の複雑な工程と、長時間かけた手織りの世界三大織物の一つです。島唄は、和歌の「５・７・５」調に対し、主に「８・８・８・６」調で唄われ、神に祈る歌や労働歌など様々で情感豊かです。民謡日本一の唄者も多く誕生しています。伝統料理「鶏飯」は、主に鶏肉や錦糸卵や椎茸をご飯にのせ、鶏の出し汁を注いで食べます。

♪今日の誇らしゃや(8)　いつよりも勝り(8)　いつも今日のごとに(8)　あらちたぼれ(6)♪

編集後記

奄美は古から豊かな自然の恵み（山の幸・海の幸）を授かり、逆に自然の猛威（台風・豪雨など）に襲われることもありました。また、奄美の人々が綿々と営んできた奄美世から那覇世～薩摩世～大和世～アメリカ世、そして大和世へと、時代の変遷に翻弄され苦難の時代もありました。しかし、奄美の人々はどの時代でも、奄美の人々が根底に持つ結の心（深く厚い人情と絆）で助け励まし合い、幾多の困難も乗り越え今日の奄美を築いてきました。

2010 年（平成 22 年）の奄美大島豪雨災害の時、各地で住民たちは、自力で避難できないお年寄りを背負い、腰までつかる濁流の中、無事助け出しました。また、下校できず不安の中で教職員らと夜を過ごす学校ももありました。そんな中、住民たちの心の支えとなったのが、地元ＦＭラジオ局の昼夜を通した放送でした。スタッフも危険な中で各地を取材し、被害状況や避難場所・安否状況など最大限に情報発信しました。

2014 年（平成 26 年）と 2022 年（令和 4 年）の全国選抜高校野球大会に大島高校が甲子園出場を果たしました。「島から甲子園」を合言葉に、中学時代から「離島甲子園」で互いに切磋琢磨し培ってきた深い絆が実を結んだのです。甲子園のアルプススタンドには、地元からはもちろん、本土在住の奄美出身者らが大挙して埋め尽くし、大島高校のスクールカラーの**緑**の帽子と服を着けた大応援団となり、アルプススタンドを揺るがす熱狂応援をくり広げました。試合には敗れましたが、劣勢の中でも全力でプレーするひたむきな姿と、大応援団と共に試合後に相手チームを讃える崇高なスポーツマンシップが感動を呼び、「応援日本一」に輝きました。快挙であり奄美の誇りです。

この書を読んで下さった（特に）小学生・中学生・高校生・若い世代の皆さん、みなさんは、進学・就職などで、一度は奄美を離れることがあるでしょう。しかし、みなさんが生まれ育った奄美を心の支えや誇りとし、そして都会で学んだ知識や技能がここ奄美で生かせるのであれば、ふるさと奄美に帰り、共に「島興し」に励んでいただけることを切に念願ご期待申し上げます。

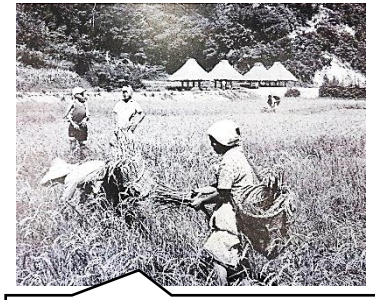
【稲作の**結わく**（共助作業）】
昭和 40 年代まで奄美各地で稲作が盛んだった。

最後になりましたが、この書の編集にあたり、多大なご指導ご協力を賜りました大和村教育委員会の高梨修先生、同じく文化協会会長の中山昭二先生、奄美博物館の喜友名正弥先生、そして諸々の情報を提供してくださった方々に厚くお礼申し上げます。

参考文献・資料（順不同）

【「大和村誌」（大和村）】　【「宇検村誌」（宇検村）】　【「名瀬市誌」（名瀬市　現：奄美市）】　【広報「やまと」（大和村）】
【「与論町誌」（与論町）】　【「龍郷町誌」（龍郷町）】　【「和泊町のあゆみ」（和泊町）】　【南海日日新聞】　【奄美新聞】
【「奄美群島日本復帰40周年記念写真集　満天の星のごとく・・・」（奄美群島日本復帰40周年事業実行委員会）】
【「博物館が語る奄美の自然・歴史・文化」久 伸博　高梨 修　山下 和　平城達哉　（南方新社）】
【講演会資料「奄美考古学発祥の地　宇宿貝塚」喜友名正弥　（奄美博物館）】
【「奄美復帰50年 ヤマトとナハのはざまで」松本泰丈　田畑千秋（ＳＨＩＢＵＮＤＯ）】
【「島唄から学ぶ奄美のことば」狩俣繁久　木部暢子（鹿児島地域文化創造事業奄美地区実行委員会）】
【「島口むんばなし」東 美佐夫（南海日日新聞社編　南方新社）】　【「奄美方言語源散策」倉井則雄（広報社）】
【「郷土の先人に学ぶ　上巻・下巻・第4集・第5集」　郷土の先人に学ぶ刊行委員会（大島教育事務局）】
【「奄美の情熱情報誌ＨＯＲＡＩＺＯＮ」奄美群島観光連盟・奄美群島広域事務組合】
【「奄美漁業誌」吉野清勇　岩井茂彦　（奄美群島水産振興協議会）】
【「まんが首里城ものがたり上巻・下巻」又吉眞三　（琉球新報社）】
【ＮＨＫ番組「歴史秘話ヒストリア　南の島の先生命がけの密航記」】
【「奄美復帰史」村山家國（南海日日新聞社）】　【「あの日あの時」実島隆三（南海日日新聞社）】
【「奄美の奇跡」永田浩三（ＷＡＶＥ出版）】
【「南島雑話の世界」名越 護（西日本新聞社）】
【「黒糖騒動記」前田長英（海風社）】【「史伝　丸田南里」林 蘇喜男（大島新聞社）】
【「奄美の債務奴隷ヤンチュ」名越護（南方新社）】
【「苦い砂糖　丸田南里と奄美自由解放運動」原井一郎（高城書房）】
【「足でまとめた奄美大島史 碑のある風景」籾 芳晴（株式会社丸山学芸図書）】
【「奄美諸島の砂糖政策と倒幕資金」先田光演（南方新社）】
【「奄美シマウタへの招待」小川学夫（春苑堂出版）】
【「新編　新しい社会６　歴史編」澤井陽介　他102名（東京書籍）】
【「新編　新しい社会　歴史」島津 弘　高橋慎一郎　谷口将紀　他11名（東京書籍）】
【「日本の歴史」監修・山岸良二　他　（ポプラ社）】
【「角川まんが学習シリーズ日本の歴史」（株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ）】
【鹿児島県の歴史】鹿児島県郷土資料研究会（光文書院）】
【「ほこらしゃや奄美」（鹿児島県歴史・美術センター黎明館）】
【「ふるさと奄美群島写真集」（樹林社）】
【「軍政下奄美の密航・密貿易」佐竹京子（南方新社）】
【「密航・命がけの進学」芝 慶輔（五月書房）】

【協力（資料提供・推敲等）】　高梨 修（大和村教育委員会）
中山昭二（大和村文化協会）　喜友名正弥（奄美博物館）



昭和30年（1955年）頃の大和村の群倉風景（提供：大和村）

令和６年（2024年）の大和村の群倉風景（提供：大和村）

奄美の高倉の歴史は諸説ありますが、弥生時代の登呂遺跡（静岡県）の高倉や奈良時代の正倉院倉庫と構造が似ていることから、同時期から伝わる建造物ではないかと言われています。また、東南アジア各地にも高倉と似た高床式倉庫があることから、海上貿易が盛んだった琉球王国を経て奄美に伝わったという説もあります。　【上写真の群倉案内掲示板より】

ヤコウガイの研磨過程